

棚尾地区まちづくり事業

平成26年1月22日（水）19時～

棚尾公民館3階

## 第31回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

平和用水、堀川の沿革、青年団、鋳物業など

2 テーマ55 「達吉のふるさと歌」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 連絡事項・情報交換など

「高札舎」を棚尾地区広報板として活用  
行事日程や史跡写真の掲示

4 次回日程

第32回2月19日（水）午後7時から 「五代永坂空兵衛と和歌」

第33回3月19日（水）午後7時から 「矢作川と八村川」「棚尾の農業用水」

## 「達吉のふるさと歌」

### 1 要旨

藤井達吉は明治14年（1881）父忠三郎、母かぎの三男として源氏町に生まれた。ここは母方の祖母の実家斎藤の地で、兄弟は多く祖母に育てられた。又、幼い頃は凧を上げて遊ぶのが好きで、凧吉と呼ばれたと晩年に書いた自伝的随筆「矢作堤」で述べている。

満11歳で当時は妙福寺にあった棚尾小学校を卒業すると丁稚方奉公のため、棚尾を離れた。しかし、ふるさとへの思いは強く、後年永井賓水の俳誌アヲミの表紙絵を描き、高浜虚子の2度目の来棚にも同行し、棚尾小学校改築には作品を寄贈するなどふるさとへの援助を惜しまなかった。また、昭和27年（1952）に母方の祖先で前浜新田を開墾した斎藤倭助没後百年祭の記念碑除幕式に参列し、その話を知人に誇らしげに語っている。

そのため、達吉にはふるさとを懐かしむ歌が数多く残っている。『うぶすなの 祭り太鼓の 音聞けば 幼き如し 我老いぬれど』や『凧おもへば ふるさとこひし 凧おもへば 幼きおもひで 青麦の香に』などである。これらの歌を詠むと達吉のふるさとへの熱い思いが伝わって来る。

### 2 主な参考文献

藤井達吉に関する文献は多数あるが、歌に関し今回参考にした主な文献を年代順に掲載する。

「碧南市史料・藤井達吉翁」碧南市教育委員会 昭和31年発行

「藤井達吉の生涯」山田光春 昭和49年発行

「藤井達吉先生」中根仙吉 昭和50年発行

「旅人われは一小説・藤井達吉」桑原恭子 昭和59年～60年 中日新聞連載

「藤井達吉遺歌集」瀬戸市 平成5年発行

「達吉とうた」岡崎市美術館 平成9年

「藤井達吉芸術の歩み」加藤良平 平成9年発行

「碧南藤井達吉芸術文化現代」第1号～14号 碧南芸術文化振興会発行

「藤井達吉物語」浅井久夫 平成18年発行

### 3 年表

ふるさとに関連する主な年表は次のとおりである。尚、年齢は満年齢に統一した。

明治14年(1881)	6月6日	父忠三郎、母かぎの三男として棚尾村字源氏41番地に生まれる。兄安次郎、重二郎、姉すず(篠)、妹くわ(桑)、ふさ(房)の六人兄弟である
〃	21年(1888)	7歳 棚尾小学校に入学
〃	25年(1892)	11歳 棚尾小学校卒業 この頃まで棚尾に住み、知多郡大野町(東海市)の木綿問屋尾白商会に丁稚奉公にでる
〃	36年(1903)	22歳 この頃より絵を描き、歌を作る
〃	43年(1910)	29歳 この頃郷里から上京した家族と上野桜木町に住む
大正	2年(1913)	32歳 父忠三郎死去
〃	11年(1922)	41歳 俳誌「アヲミ」との交流始まる 友人と小田原の帰りの車中で俳誌「山鳩」(西尾発行)の広告で俳誌「アヲミ」と編集者永井賓水を知り驚く
〃	12年(1923)	42歳 母かぎ死去 母の法要に故郷へ帰り、アヲミを訪れ貧水と会う。故郷に全然好意を持っていなかったのが、三十年ぶりに棚尾に懐かしみをもった。 この年アヲミ5月号に表紙絵(遊魚)と随筆(春の夜の思ひ出)掲載。
〃	15年(1926)	45歳 碧南市道場山樅山平一郎方及び鶴州楼に滞在し、陶芸品焼物を試作し白木屋にて発表
昭和	3年(1928)	47歳 小品展を妙福寺書院、西尾井桁屋階上にて開く 高浜虚子二度目の来棚に達吉が同行。
〃	4年(1929)	48歳 道場山の窯場で「阿宇美焼」 この頃平岩幸左衛門の弟子が達吉に幸左衛門の喜寿の祝いに寿像の制作を依頼し、台座のみを達吉が三河土で作る
〃	5年(1930)	49歳 原籍を東京に移し郷里と決別
〃	14年(1939)	58歳 妹くわ死去
〃	19年(1944)	63歳 妹ふさ死去
〃	23年(1948)	67歳 招かれて碧南に行き、長田秀吉、長田一郎の両友に「別去(わかさり)」を贈る。長田家に歌碑建立。
〃	25年(1950)	69歳 小原より碧南市道場山に転居
〃	27年(1952)	71歳 母方の祖先である前浜新田斎藤倭助没後百年祭に姉すずと参列。権現崎で傘松供養の会が行われ、歌を詠む。

〃	28年(1953)	72歳	愛知県文化会館に手持美術品千余点を寄贈する
〃	29年(1954)	73歳	平岩鉄工所の工場見学をする
〃	31年(1956)	76歳	碧南より沼津市に転居
〃	36年(1961)	80歳	この年から翌年にかけて自伝的随筆「矢作堤」執筆
〃	39年(1964)	83歳	8月27日 死去
〃	50年(1975)		棚尾小学校に歌碑建立
〃	平成13年(2001)		第1回鶏頭忌が営まれる
〃	20年(2008)		碧南市藤井達吉現代美術館が開館

#### 4 達吉の歌の表記方法

達吉の歌には次の二つの特徴がある

**その1 歌が単独ではなく、絵の中に画賛として表記されている**

**その2 万葉仮名で書かれているため、習熟した人でないと読めないことである**

例えば八柱神社社務所の「旭日群峰画賛」には絵の中に次の二つの歌が記されている。

尚、《 》は、この資料のみに付けた整理番号である。

加納俊治氏による読み下し

(原文)

雲布須那能 閑美丹地加非 萬布散九盤

起美駕万二萬尔 奈二い布倍之也

(かなに変換)

うぶすなの かみにちかひ まふさくは

きみがまにまに なにいふべしや

(詠み方)

《1》 産土の 神に誓ひ 申さくは

君が間に間に 何言ふべしや

(原文)

有布春奈農 万都李堂い古の を東支氣波

遠散那伎許登志 和礼於非ぬ連抒

(かなに変換)

うぶすなの まつりだいこの をときけば

をさなきごとし われおいぬれど

(詠み方)

《2》 産土の 祭り太鼓の 音聞けば

幼きごとし 我老ひぬれど

(解説) 神社のお祭に関する歌が多くあるが、「家庭手芸の製法」で次のように語っている。「姉や妹がお祭に行くときの手提袋や帯や着物なども、やはり嬉しくて懐かしい思ひ出を呼び起こします。しかもさうしたことは私どもの家だけでなく、その頃の一般の風習でした。着物なども好みの縞に織り、糸も自分で染め上げたものでした。」母かぎは近所の娘に裁縫を教えていた。

## 5 棚尾に残る歌碑

### (1) 棚尾小学校の歌碑 昭和50年建立

《3》 まなびにし 学校あとの 老松の木よ  
われをしるらむ おさなきわれを

### (2) 長田眼科の歌碑 昭和23年建立

《4》 いのちありて ふたたびとはじと ちかひてし  
ふるさととひぬ さだめとやいはむ

## 6 文献に載っている歌

文献別にふるさとの歌を拾い出すと以下のとおりである。但し、重複する歌は先に掲載した文献に載せた。

### (1) 「碧南市史料・藤井達吉翁」

掛け軸「著色ぼけの花」中の歌

《5》 ふるさとの やはぎのかはも はるなれや  
つばなぬきつゝ おさなきごとく

(昭和31年 郷里出立の前日に)

《6》 古里の 六とせの旅も 夢と過ぐ  
老いはらからは 何処へ行くらむ

(同上 門扉に張る)

《7》 古里は 遂に我を 知らざりき  
知らざる哀れ 知られざる哀れ

### (2) 「藤井達吉の生涯」山田光春

友である長田秀吉に贈った「別去」の中で離郷のことについて心境を述べている

《8》 ふるさとの あをみの郡 波たぎり  
氷の刃 いただくすべなし

《9》 ふるさとの あをみの郡 人はいさ  
赤き土こそ こひしきものを

《10》 ふるさとに とわのわかれの 旅するなり  
おくられて行く はつなつのあさ

《11》 おさなきに 通りし坂を おもひ見き  
あの松この石 われを知るらむ

《12》 神垣の 石のあいより 夢に見し  
へびやおるらん われを知るらん

《13》 いつしかも 大浜道を あるき居りぬ  
塩田なつかし 麦うれにけり

《14》 この道を あれよこれよと ゆきゆけば  
あひ見し人の しる人もなし

《15》 わかれじの たびねはさみし 矢作川  
千鳥なくなり 麦うれんとす

- 《16》 ふたたびは あわじと思ふ ふるさとの  
矢作の川に ちどりきくとは
- 《17》 生家をおそろしきもの 見るごとく  
うらの畑に 立ちて見しかな
- 《18》 今生の わかれにしあらば ふるさとよ  
赤き土にも 心ひかるゝ
- 《19》 凧おもへば ふるさどこひし 凧おもへば  
幼きおもいで 青麦の香の

(解説) 凧については自伝的随筆「矢作堤」で少年時代を懐かしんでいる。

「私の故郷では旧正月に凧揚げをいたしますが、それは骨組みから紙張りや絵どりまでみな父母や兄弟の好みにまかせて作り上げるものでした。」

「友と遊ぶよりも凧を上げて遊ぶのを此の上なしとしたれば、家人に達吉にはあらで凧吉といはれたり。」

- 《20》 凧ゆえに ゑにしとなりて 小原野に  
いほりするてふ ことのふしぎさ
- 《21》 たこあげは 何かおもはむ これの世に  
凧こそわれの 浄土にてありし
- 《22》 凧吉が 老ひけるけうの 六十八年  
そもさんなんじ なにして老いか  
(傘松)
- 《23》 傘松よ とはにわかれて いくとせぞ  
今日の供養に 逢ふわれ老ひたり
- 《24》 さだめなり さだめなりけり 人の世の  
われ老ひぬれて 傘松にあふ
- 《25》 年たけて われ傘松を 訪ひにけり  
けふのつどひの 嬉しきものぞ
- 《26》 ふるさとよ こころおくしも なにかせむ  
あめふらばふけ かぜふかばふけ
- 《27》 ゆきがてに あがあれし家を のぞき見ぬ  
ざくろの大樹 いかにくやと
- (解説) 自伝的随筆「矢作堤」で生家の樹木について語っている。
- 「おさなき日のあのざくろのいかにたぬしかりしよ おもへばなつかし 家の西の槇の並樹幾年後おもひて 小供の折しかられてあがのぼりし槇を一本分割たのみ 茶杓を作りて知人に贈らんとせしも いまだ仕上らずありぬ」  
(昭和37年元旦 よくも生かされしものぞや)
- 《28》 ちゝのみの ちゝに手ひかれて もうでにし  
うぶすなのかみの なつかしきかな
- 《29》 おひぬれて おさなきごとし ちゝはゝを  
おもへば ことはもなし

《30》 ちゝはゝよ はらからよ ゆへしらに  
なつかしかもよ はつそらを見ており

《31》 矢作堤よさらば  
かぎりなきおもひでも やめることにする

(3)「藤井達吉先生」中根仙吉

《32》 正月の 来る坂ぞと 楽しめし  
おりどの坂 われたづね来し

《33》 おもひきや ふるさとびとの たづねきぬ  
かたるもあわれ にはの花ちる

(解説) 中根仙吉が湯河原を尋ねた時は、岡崎に引越しをする荷造りの最中であった。  
同氏が帰った後にガラス戸にマジックでこの歌を書いた。

(4)「藤井達吉遺歌集」瀬戸市

故里の歌の部

(新須磨にて)

《34》 をちばかく 子らはさやけり 衣ヶ浦  
かすみたなびく まつのしたかげ

《35》 いその香に おさなおもひで なつかし  
このいそのかよ ひさにあひにき

《36》 おさなきの ごときちゝはゝ こうしかりけり  
おひぬれて つへをたよりに ふるさとをゆく

《37》 きみこづば かたみにせよと あとふたり  
うゑしまつのき きみをまちてぬ

《38》 ちどりなけ このふるさとの たびごろも  
われおひにけり としゆかむとす

(棚尾の生家にて)

《39》 ゆきづりに あかあれし家を のぞきみぬ  
ざくろのおいき いかにくやと 《27》と似るが読みが若干異なる

《40》 木蓮の のこむの花の 二つ三つ  
さきてあるかな さなつくるいへに

《41》 ちゝこひし ちゝはゝこひし おひぬれど  
ちゝはゝもへば おさなきごとく

《42》 ひとのよの なさけるまに のせられて  
はるさめの夜を いほにかへれる

《43》 ふるさとの ゆきはうれしも をさなきを  
おもひいでつゝ ひとりあゆめり

《44》 をさなきを おもひなつかし みやかきかわ  
ひとりしゆけば ちどりしぎなく

《45》 をひともが もてきてくれし かきのみの  
ひかりをみつゝ かたりけるかな

- 《46》 をひぬればこそ ちゝはゝこひし きのふけふ  
をさなきごとし こうはうれしき
- 《47》 ちゝのみの ゆかしゝとしを すぎぬれど  
ちゝをおもへば おさなきごとし
- 《48》 あきこぬと われにつぐかや いほなはの  
あしたのゆうべに むしのなくなる
- 《49》 やはぎつゝみの はるのゆうぐれ ゆめのごと  
あをむぎと なのはなざかり あめのおとかな
- 《50》 はるなれや はるはきにけり ふるさとの  
野みちをゆけば かげらうたちぬ
- 《51》 ふるさとに 来は来ぬれど さみしかりけり  
ふゆさめの しくしくふれば ちゝはゝこひし
- 《52》 たびにあれば ちゝはゝこうし いへにあれば  
なほぞこうしも われおひぬれど
- 《53》 ちゝはゝを とむらうとしと なりにけり  
われおひぬれど ちゝはゝこひし
- 《54》 ことしもや なつたちにけり ふるさとの  
やはぎのかわべに われたちにけり
- 《55》 ふるさとも はるたちぬれば かげろいて  
おさなおもひで けふもするかな
- 《56》 いほざいの おとをきゝたり このゆうべ  
ちどりなくなり つきのまちかくに
- 《57》 はろばろと うばくるまおして おほきすいか  
もてきてたびし おいともうれし
- 《58》 ちゝのみの ちゝに手ひかれ うぶすなの  
かみにもうでし おもひでなつかしも
- 《59》 うじがみの まつりにあれど なにもなし  
かにもかくにも ちやなとたてめせ
- 《60》 凧ずきの われにてあれば たこきちの  
おさなきをもひで われおひぬれど
- 《61》 なにといふ うつくしさもて ふるさとの  
ころもがうらの あさぎりにてあるか
- 《62》 うぶすなの かみにもふでゝ ねがうことなし  
きみがまにまに かしわでをうつ
- 《63》 わがいほの うらのはたけに ひばりこよ  
あしたゆうべに なけよなけなけ
- 《64》 さむざむと きたかぜふけば ふるさとの  
くさのいほりの さむくぞあるかな
- 《65》 さゝかなる あがいほにはの かきつばた  
あめにぬれつゝ ひと はなさけるも



- 《66》 うぶすなの かみのみにはを おもひおれば  
 ふるさとびとの たづねきにけり
- 《67》 あきなれや 神楽太鼓のおとの きこへるかも  
 われもゆかんず おさなきごとく  
 (前浜新田開拓者)
- 《68》 まえはまの このひろはまを ひらかれし  
 翁のこゝろの かしこかりけり
- 《69》 東そふがたびし つばきのはなの うれしくて  
 われそなへける ちゝはゝのために
- 《70》 うぶすなの かみにもうでゝ うれしかり  
 をさなきごとく たゞにおろかむ  
 (昭和31年 新川道場山より沼津へ)
- 《71》 ふるさとの 六年もゆめと すぎにけり  
 いざやあずまの たびにしいでなむ
- 《72》 あがあれし にはの花ゞ めにうかびきぬ  
 おさなきことの うれしかりけり

雑詠の部

- 《73》 ふるさとを わかれてなれは いくゆくかや  
 ひとのよの たびねかさねぬ これのよのたび
- 《74》 ふるさとの はたけのさちぞ ふるさとの  
 香をなつかしみつゝ たびしこのさち
- 《75》 をひぬれど わかきふるさと ひとになにかおくらむ  
 にぎたつ血をばを 見れよふるさと  
 昭和26年 矢作川堤の歌の部 (継色紙に書かれている)
- 《76》 かわふねの いくゆくかよ のぼりゆく  
 ふねのうへに 千鳥なくなる

(解説) 晩年に書かれた自伝的随筆「矢作堤」の書き出しは以下のとおりであり、達吉のふるさと棚尾への熱い想いが伝わってくる。

「幾年か前、青麦なたねの花盛りを堤の上に立ちて 郷土近くの村々 今は市となりつれど 堤から見れば 幾十年か昔 幼き頃の有様の目に浮かびて涙ぐましくもありなつかしくも そのおもひ出も 粗雑の点々の 写生ともつかぬ見とり図して帰りたるに 近頃それを見つけ かぎりなき思ひをかきつけて見き」

- 《77》 かそかにも きこゑきぬるは いとひきの  
 うたか千鳥か ひばりのこゑか
- 《78》 ひとのよの 旅ねかさねて おひわれの  
 矢作堤よ たてばなつかし
- 《79》 春の日を 蝶のいくつ とびてゆくなり  
 をさなきごとく われは見てをり
- 《80》 かきかきて 夢は矢作の 堤かや  
 夢をおひつゝ 筆はひとりゆく

《81》 修平先生の とがりづきんを おもひいでにき  
矢作堤に あひし春日ぞ

(解説) 師であった杉村修平については、77歳の喜寿の折り、詩でも思慕の想いを述べている。

「七つ 八つ 修平先生に 大学 論語 一話も 知らねど 先生恋し」

- 《82》 をもひきや 矢作堤に 春の日を  
をさなきおもひで うれしかりけり
- 《83》 をさなきの ひばりのうたを おもひいでつゝ  
堤にたてば 夢のまた夢
- 《84》 かわ舟の 上り下りの かいの音  
千鳥のうたと このしづけさよ
- 《85》 今生 なにねがふなき われなれや  
矢作堤ぞ をさなきおもひで
- 《86》 なにかきて あるかやたゞに 夢をおふ  
をさなき夢の 春日の日の夢
- 《87》 けふのこと われきへてゆけ 名利なく  
世のすべてなき たゑゆく身ぞも
- 《88》 いとくれる 水車の乙女よ をひぬらめ  
おもひでにつゝい くるひともあらな
- 《89》 いくとせぞ 七十年の 夢をおふ  
矢作堤に 千鳥なくなり
- 《90》 矢作川 わたしをよべる こゑすなり  
千鳥のこゑと 春日のけさ
- 《91》 芝つみて かわくだりくるふねの なつかしも  
千鳥なくなり なにかたるかに
- 《92》 おさなきの ひばりおひつゝ ありし日の  
目にうかべつゝ 堤にたてば
- 《93》 ひばりひばり あげひばりよ さげひばりよ  
この春日ぞも うたへようたへ
- 《94》 ふるさとを はなれて七十年 夢のゆめ  
人はかわれど 花のいろかわらず
- 《95》 いざさらば わが古里よ さちあれと  
合掌しつゝ われはさりゆく
- 《96》 川の瀬に みどりのむれの なにかたるかや  
なれよしれるか おさなきわれを
- 《97》 いく日ぞも おもひでにつゝ かきにけるかな  
古里のいろ 鳥のこゑかな
- 《98》 たちをれば まぢかにきなく 千鳥うれしも  
このよになれと われのみとおもへる

- 《99》 いとひきの 水車乙女の こゑきこゆ  
なくか如くに うたふか如くに
- 《100》 おさなきの をもひでいふかや あげひばり  
われおひぬれど おさなきごとし
- 《101》 ひばりなきて われにかたるがに ちかぢかに  
くるはうれしも この春日ぞ
- 《102》 むこうがしに 渡しのよべる こゑすなり  
舟こぎいでぬ すがたうかぶかな
- 《103》 夢のごと おさなきあれこれ おもひいで  
蝶のむれゆく 見てはたぬしも
- 《104》 くるまにのり 母そばにいだかれつ ゆきしをもひで  
菜の花ざかりを いだかれて
- 《105》 ひばりなき 千鳥なくなる 矢作堤に  
ひとりしあれば なみだぐまるゝ
- 《106》 をさなきの われしる千鳥 ひばりかや  
あまりなつかし なれがうたはも
- 《107》 をさなきの ともはみな ゆきしけふ  
老ひぬるわれの ひとりたちをり
- 《108》 なになくも ひばりのこゑの なつかしきかも  
夢のごとくに われはたちおり
- 《109》 筏師の 川下りこぬ かひのおとよ  
なにうたふかよ かそかにきこへく
- 《110》 行々子（よしきり） かわやぎのまより きこへきにけり  
なつかしかもよ なけよなけなけ
- 《111》 ひばりきゝ 千鳥きゝつゝ ひとりあれば  
なにかねがわむ これの世とおもへなくに
- 《112》 ひばりあげぬ 蝶のむれきぬ おゝ春日ぞも  
矢作の川の このしづけさよ
- 《113》 松風の おとをきゝつゝ おさなともと  
かたるなにか七十年の 夢よ又夢
- 《114》 ひとのよの 旅ねかさねて おさなきごとく  
なれがうたうれし 老ひぬれど
- 《115》 古里びと ついにわれ しらなくに  
千鳥よひばりよ なれは知るらむ
- 《116》 おもひでは たゆることなし 幾十年の  
おもひでなつかし 風あげわれは
- 《117》 これの世に われひとりかと おもひつゝ  
このしづけさを うれしきものを
- 《118》 今生に なごりともへば はなれがたきよ  
菜の花ざかり 麦のほのいろ

- <<119>> 矢作川 つゝみをゆけば をさなきの  
 おもひでなつかし ひばりのこゑかな
- (5)「達吉とうた」岡崎市美術館  
 (つつじ)
- <<120>> 古里の なごりの丘に つつぢ花  
 しずかに咲けり ものがたるかに  
 (ぶどう)
- <<121>> 秋なれや 神楽太鼓の音の きこへ来るかも  
 われもゆかんず 幼きごとく
- (6)「碧南藤井達吉芸術文化現代」碧南芸術文化振興会  
 ア 第2号から「扇面流し」道場山時代の作品  
 扇のうち八十二面に歌が書かれているがそれらの殆どが故郷を詠んだ歌である。
- <<122>> あれしやの まきのいけがき こひしきに  
 ものいひかけぬ おさなきおもひで
- <<123>> うぶすなの まつりたいこの おときけば  
 おさなきごとく われはたちおり
- <<124>> とびはぜを おひてあそびし をさなきを  
 ひさにしみれば うれしかりけり
- イ 第7号 碧南市史第一巻の装丁原画に書かれた歌。  
 (日の出と松)
- <<125>> ふるさとの 思ひでなつかしや おひぬれど  
 あの松あの川 めにうかひきぬ  
 (採用されなかった原画に書かれた歌)
- <<126>> ふるさとの かみにもふでて ねがふことなし  
 きみがまにまに ただにぬかつく
- (7)「南中郷土史資料」村瀬正章  
 弥生の井について
- <<127>> 産土の 神の御庭の 水くみて  
 にないて水のむ 音のしたしも